

論文

# 怒りの抑制高群に特有の感情語に対する 内包的意味の傾向

—— スキーマ理論に基づく評定語を用いたSD法による測定 ——

黒木優花

〔抄録〕

意思伝達において感情の適切な解釈は重要であるが、感情の内包的意味の個人差は、そのような意思伝達に誤解を生む可能性がある。本研究は、感情語の内包的意味の個人差と怒りの抑制傾向との関連の検討を目的に行った。内包的意味の測定には Young の早期不適応スキーマ (early maladaptive schemas) の概念に合致すると考えられる形容詞対を用いた。怒りの抑制が潜在的自己愛と関連する感情であるため、怒りを抱きやすく抑制しやすい者ほど感情語の内包的意味が潜在的自己愛タイプの (covert narcissism) になる傾向が見られるという仮説の下、SD法にて検討を行った。その結果、仮説は「怒った」という感情語に対する制約の欠如スキーマ、「悲しい」に対する自律性と行動の損傷スキーマに関連した内包的意味において支持された。これらの結果は、自己愛タイプの、潜在的自己愛タイプの特徴を反映したものであると考えられ、感情語の内包的意味の個人差が怒りの抑制に影響する可能性が示唆された。

キーワード：感情語の内包的意味、早期不適応的スキーマ、怒り

## 第1章 序論

### 感情語の内包的意味と早期不適応的スキーマについて

我々は、他者と意思伝達を図る際、言葉で自分の気持ちを表明したり、他者が用いた言葉の意味を読み解き、他者の感情状態を推測したりする。だが、そのような言語情報の解釈では、度々誤解が生じ、時にはそのような誤解が対人的問題の原因となることもある (三宮, 2008)。Wardhaugh (1985) は、そのような誤解が生じやすい場面の例として、自己の考えや気持ちを他者に伝達する場合または、相手の気持ちや考えを受容する場合を挙げ、感情伝達場面と誤解の生じやすさの関連を指摘した。この例として、三宮 (2008) は、A・Bが、部活の顧問から、

「次の部長、副部長はお前だからしっかりやれ。」と言われた際、部長に任命されたBがAに対し、「(部長を)ちゃんとやれるかな。」との不安を話したところ、Aが、Bは、「(BがAとの関係を)ちゃんとやれるか。」を懸念していると捉え、いじめに繋がったことを挙げる。

このような誤解を生む要因の一つとして、個人が用いる感情語の内包的意味 (connotative meaning) の違いが考えられる。まず、感情とは、気分 (mood) や情動 (emotion)、欲求 (physiological needs) を含む広義の概念である (坂上, 1999)。Lewis (1995) は、感情の獲得は、他者との関わりの中で発達する意識 (conscious) の獲得に伴ってなされるものであると考えた。そして、発達の過程で内在化された他者の視点を用いて自分を客観的に見つめ、自分の行動を基準と比べて評価することで生じる照れ (embarrassment) などの自己意識的評価情動 (selfconscious evaluative emotions) を高次の感情とし、高次の感情獲得の前段階にある感情を基本的情動 (basic emotion) と呼んだ。基本的感情とは、喜び (pleasure)・怒り (anger)・悲しみ (sadness)・嫌悪 (disgust)・恐怖 (fear)・驚き (surprise) などであり、生後6か月までに獲得されるものを指す (Lewis, 1995)。このような感情の機能について、Gray (1987) は、闘争もしくは逃走反応 (fight or flight) といった、環境への適応行動の解発機能を挙げる。それに加えて、戸田 (1992) は、恐怖感情の表出が攻撃回避のための謝罪の代替行動と考えられることを例に挙げ、感情に他者へのメッセージ機能が備わっていることを指摘した上で、感情の解発機能とメッセージ機能が相まって相手または集団との関係維持を図るコミュニケーション機能を為すことを説明した。さらに、Malatesta & Wilson (1988) が、感情の機能を、自他に自分の状況を伝達する信号と捉え、感情の言語化が適応を促進する要因となることを指摘していることを踏まえると、言語化による感情の表明および表明された感情への適切な解釈は、適応的な対人コミュニケーションを行うにおいて、不可欠なものだと考えられる。

次に、内包的意味とは、言葉が持つ意味のうち、対象が連想させる他の言葉または、対象が生み出す感情や気分である (芳賀, 1988)。小椋 (2006) によると、感情語を含む言葉の獲得は、言語獲得の生得的な基盤を持つ個人と、幼少期の生育環境、養育者とのコミュニケーションといった環境との相互作用によってなされる。そして、そのように獲得され得た言葉の意味には、社会的習慣や個人的特性によって違いが見られることが指摘されている (高田, 1972)。

環境要因によって言葉の内包的意味に個人差が生じることで、感情が持つメッセージ機能が上手く機能しなかった場合、感情理解・伝達に齟齬が生じ、本人が自他感情の理解や伝達が十分に行えると考えている場合でも、現実にはそのようでない可能性が考えられる。また、そのような感情伝達の齟齬から、対人関係に不和が生じる可能性も同様に指摘できる。

感情語の内包的意味の違いを捉える際に有用と考えられる概念に早期不適応的スキーマ (early maladaptive schemas) がある。早期不適応スキーマとは、発達段階初期に形成される、人が出来事や体験を捉える際の潜在的な認知的枠組みであるスキーマ (schema) のうち、幼少期に形成され、自滅的な認知と感情のパターンをもち、非機能的に作用するものを指す (伊藤,

Table 1. 5つのスキーマ領域に対応する5つの中核的感情

5つのスキーマ領域	中核的感情
A断絶と拒絶	他者との関りにおいて得られる, 安全で安心した受容的な感覚・アタッチメント
B自律性と行動の損傷	自律性や有能性, 自己同一性の感覚
C他者への追従	正当な欲求と感情表現の自由
D過剰警戒と抑制	自発性および遊びの感覚
E制約の欠如	現実的な制約および自己制御

Young & Klosko & Weishaar (2003) より作成。

2020; Young, Klosko, & Weishaar, 2003)。Young et al. (2003) は, 早期不適応のスキーマを生得的な感情的気質と幼少期の苦痛経験の相互作用によって形成されるものとし, いまだ検討の余地があるものとしながらも, 幼少期に満たされなかった欲求を5つの中核的感情欲求 (core emotional need) という仮説的な概念にまとめた。そして, 中核的感情欲求が満たされないことが人の生き方や心の特定の部分に損傷を与えるという視点から, 5つの中核的感情欲求とそれぞれ関連する【A 断絶と拒絶】・【B 自律性と行動の損傷】・【C 他者への追従】・【D 過剰警戒と抑制】・【E 制約の欠如】という5つのスキーマ領域 (schema domains) を仮定した。5つの中核的感情に対応する5つのスキーマ領域を示した表を Table 1 に示した。早期不適応のスキーマと感情語の内包的意味には, 発達初期に獲得される環境との相互作用を基盤として形成される概念であるという共通点が見られる。従って, 感情語の内包的意味の個人差は, 早期不適応的スキーマの様態を反映したものになる可能性が考えられる。

#### 怒りの感情伝達もたらす対人関係の不和について

対人関係の維持に関連する感情の1つが怒り (anger) である。怒りは, 特に感情心理学の領域において, 自己や社会への, 意図的もしくは不当な思惑によって行われる物理的・心理的な侵害に対する, 自己防衛や社会維持のために喚起された心身の準備状態と定義される感情であり, 暴力などの形で行われる怒りの過度な表出または, 怒りを堪えすぎるといった不適切な対処は, 対人関係および個人の精神的健康に影響を及ぼすことが指摘される (湯川, 2005; 阿部・高木, 2006)。Spielberger (1985) は, 怒りを, 性格特性としての怒り (trait anger) と, 情動状態としての怒りの強度 (state anger), 怒りの表出パターン (anger expression) の3つの視点に整理した。なお, 怒りの表出パターンについては, さらに怒りの表出 (anger out), 怒りの抑制 (anger in), 怒りの制御 (anger control) の下位分類が想定されている。

これらの怒りの表出パターンには, それぞれ利点と欠点があるとされる。まず, 怒りの表出について, その利点としては, 怒りを表出する行為により自分の不満を怒りという形で開示することで, 相手が行為者について抱く猜疑心といったネガティブ感情が低下し, 親密性が向上することが挙げられる (上原・森・中川, 2019)。そして, 欠点としては, 怒りの表出が, 身体的・言語的な攻撃と結びつきやすいことから, 過度な怒りの表出は, 対人関係の崩壊といった

悪影響を及ぼすことなどが挙げられる（阿部・高木，2006）。一方，怒りの抑制・制御では，怒りを抑制することにより，攻撃性が露呈しないことが人間関係の悪化を防ぐ役割を果たすことが利点として挙げられる。その反面，過度な抑制は，行為者の真意が他者に伝わりにくいことから，他者の非友好的態度といった対人関係の不和や，対人関係上の問題が一因となって生じる強迫性障害や摂食障害と言った障害の発生，または，ストレス・葛藤が蓄積する要因となり，「キレル」ような衝動的な怒りと結びつきうることが欠点として指摘される（Nolen-Hoeksema, 1991 ; Shannon, Josie, & Suja, 2002 ; 宮下・森崎，2004）。

### 怒り感情と関連する概念と介入法

怒りの不適応的な抑制・制御が生じる理由として，怒りと自分自身への関心や自信，優越感といった肯定的感覚によって特徴づけられる性格特性である自己愛（narcissism）の関連を指摘する立場からは，怒りの抑制は，潜在的自己愛タイプ（covert narcissism ; 以降，CN とする）の特性によって生じる可能性が指摘される（小塩，2002）。潜在的自己愛タイプとは，特権意識や誇大性を特徴とする誇大タイプ（overt narcissism ; 以降，ON とする）と潜在的自己愛タイプに大別される自己愛タイプの内の1つであり，脆弱性や他者依存がその特徴となる。また，CN が怒りの抑制因子として働く理由として，阿部・高木（2006）は，CN が他者の期待に応えようとして行動する他者志向的な特性を持つことを挙げる。このような自己愛を含む性格特性は，その形成に幼少期の養育者との関係などの環境的要因の関連が指摘される点で，早期不適応スキーマおよび感情語の内包的意味の獲得過程と類似している（平井，1991）。

しかし，背景要因が何であれ，怒りの表出パターン各々に利点・欠点があることを踏まえると，対人適応においては，相手や場面により適切な表出パターンを選択する能力を有していることが重要になると考えられる。怒りの表出パターンの選択に関わる要因として，阿部・高木（2005）は，怒りを表出することが正当かを吟味する，怒り表出の正当性評価を挙げる。そして，Novaco & Taylor（2008）は，怒りの正当性評価を含む，自他の怒りへのより適切な対処方策を考察・獲得するための方法として，アンガーマネジメント（anger management）を提唱する。

アンガーマネジメントとは，怒りといった感情や攻撃的行動の自己制御能力促進のための構造化介入と定義される方法であり，自他感情を正しく理解するスキル・自分の怒りの理由に対する客観的考察または，自分の怒りのパターンを適切に把握するスキル・怒り感情へのコピーングスキルといった3つのスキルを獲得することによって，怒りの不適切な表出，抑圧・制御の防止を目指すものである（Navaco & Taylor, 2008）。アンガーマネジメントで獲得が目指される，他者関係構築のための実践的な力の一つにアサーション（assertion）がある。これは，自分の気持ちや意見を適切な方法で，なるべく率直かつ正直に表現するスキルである。アサーションを身に着けるアサーション・トレーニング（assertion training）において，自分の感情を適

切な方法で適度に相手に表現できる状態は、アサーティブ (assertive)、怒りといった自身の感情を抑圧する傾向はノン・アサーティブ (non-assertive) とそれぞれ呼ばれる (園田, 2002)。アサーティブな能力の発揮による適度な怒り感情の伝達は、他者との親密性を高めることが指摘される一方、ノン・アサーティブな状態は、行為者の真意が他者に伝達されにくく、他者からのからかいやこきおろしといった、対人関係の不和に繋がりやすいことが指摘される (阿部・高木, 2006; 園田, 2002; 上原・森・中川, 2019)。

怒りを感じやすい性格特性を持つ者はそうでない者と比べ、怒りの表出パターンの選択の機会が相対的に増加すると考えられる。また、怒りの表出パターンのうち、怒りの抑制・制御は、非友好的態度などの対人関係の不和のみならず、ときにそれが精神的な障害と結びつきうる可能性が指摘される点で、怒りを表出した場合と比較し、怒りが個人に及ぼす影響が長引きやすいことが指摘できる。言葉による感情伝達を行う際、怒り感情を抑制・制御しやすい者は、発達初期に形成される性格特性の自己愛の中でも、特に怒りの抑制・制御と関連が深いと考えられる潜在的自己愛タイプの特徴である、脆弱性や他者依存といった潜在的自己愛タイプの特性を感情語の内包的意味に込めやすいといった違いがある場合、感情語のコミュニケーション機能が十分働かず、怒りの正当性評価の基準やアサーション方法が他者と一致しなくなることで、怒りの抑制・制御を招く要因となる可能性が考えられる。

### 本研究の目的と仮説および予測

本研究では、持続時間や先行因の有無から情動 (emotion) と区別して用いられることもある「感情」を、坂上 (1999) の定義から、情動や気分を含む広義の概念と定義した。加えて、内包的意味を、芳賀 (1988) の定義を参照し、身近な人とのコミュニケーションに用いる言葉として感情語を呈示した際、その感情語から連想されるその他の言葉および感情や気分のうち、SD法にて補足しうるものと定義した。また、感情の表出は、見知らぬ他者よりも同級生や親などの身近な他者において促進されやすいという違いがある (井上, 1999)。これらを踏まえ、本研究では、身近な他者に対して用いる感情語の内包的意味に着目し、身近な他者に対して用いた基本的感情語の内包的意味の個人差と、怒りの抑制傾向の関連を検討することを目的に行った。そのため、怒りの抑制・制御と関連するとされる自己愛の測定はあえて行わないものとした。

感情語の内包的意味の個人差が怒りの抑制の要因となるならば、怒りを抱きやすく抑制しやすい者ほど感情語に潜在的自己愛タイプの特性を内包する意味を込めやすく、怒りを抱きにくく抑制しない者ほど感情語の内包的意味を大多数の他者と同じように評価すると考えられる。従って、怒りを抱きやすく抑制しやすいものほど、感情語に潜在的自己愛タイプの特性を内包する意味を込めやすい傾向が見られることを仮説とした。

具体的には、上杉 (1988) など、感情のイメージ研究においてよく用いられると思われる形容詞対のうち、Young et al. (2003) が想定した5つのスキーマ領域それぞれに沿うと考えられ



る形容詞対を用いて、SD法にて感情語の内包的意味を測定する。仮説が正しければ、怒り抑制高群では、中核的感情からみて特に潜在的自己愛タイプと関連が強いと考えられるスキーマ領域である【B 自律性と行動の損傷】、【C 他者への追従】、【E 制約の欠如】において、どの感情語においても自己の過小評価や他者依存的な評価と関連すると考えられるネガティブな評定が多く見られ、感情語の評定が平均値から遠ざかると予測する。

## 第2章 方法

### 第1節 調査対象者、調査日時、および場所

2021年9月から10月の間に大学生124名を対象に調査を実施した。調査対象者は、回答漏れがあった1名を除く123名（男性42名、女性81名）であり、平均年齢は20.1 ± 1.3歳であった。調査場所は関西圏の私立大学と民間経営の学習塾であり、調査対象者は、関西圏の私立大学に通う大学生および、民間経営の学習塾で非常勤講師として勤務する大学生であった。どの場所も質問紙の回答に支障のない静けさが保たれていた。

### 第2節 質問紙法調査

(I) SD法にて感情語の内包的意味を測定した。標的語はLewis (1995)の6つの基本的感情のうち、他の感情と比べて生理的反応との関連が強く、原始的な反応であると考えられる驚きを除く、喜び、悲しみ、怒り、怖れ、嫌悪の5つを用いた（山根, 2005）。形容詞対については、上杉 (1998)等のSD法を用いた感情に関する研究で使用された形容詞対のうち、スキーマ領域の名称、またはスキーマ領域に対応する中核的感情から連想されるもの（例えば、【D 過剰警戒と抑制】では、スキーマ領域の名称の一部である「抑制」と類似した意味を持つ「抑圧的な」と、その対義語である「解放的な」をその領域に属する形容詞対とした。また、警戒が生じるのは「危険」を感じた時であるという連想が成り立つことから、「危険な」とその対義語である「安全な」を採択した）を、臨床心理学科に属する学生3名、教員1名で領域ごとに協議し、それらをYoung et al. (2003)が想定する5つのスキーマ領域（schema domains）に対応すると考えられる形容詞対として使用した。形容詞対は、それぞれの領域につき5つ、合計25個を使用した。標的語1つにつき25個の形容詞対を用い、「あなたが身近な他者に対して（各感情語）という言葉を使って気持ちを伝えようとするとき、その言葉にはどのような意味が込められているでしょうか」という教示の下、標的語ごとに7件法で回答を求めた。各スキーマ領域に属すると考えられる形容詞対をTable 2に示した。総項目数は125個であった。

(II) STAXI (State Trait Anger Expression Inventory) 日本語版（鈴木・春木, 2010）より「特性怒り」10項目、渡辺・小玉 (2001)の研究より、怒りの表出パターンの中でも特に対人関係の不和や怒りの持続に結びつきやすいとされる怒りの制御・抑制傾向に着目し、「怒りの抑制」

Table 2. 各スキーマ領域に属すると考えられる形容詞対

A断絶と拒絶	B自律性と行動の損傷	C他者への追従	D過剰警戒と抑制	E制約的の欠如
あたたかい-冷たい 安定的な-不安定的な 親しみやすい-親しみにくい 幸福な-不幸な 明るい-暗い	満足な-不満な 頼もしい-頼りない りこうな-ばかな 広がりがある-広がりがない 有意義な-価値のない	独立的な-依存的な 能動的な-受動的な 平気-怖い すき-きらい 優しい-敵しい	穏やかな-激しい 安全な-危険な 解放的な-抑圧的な 公然の-秘密の 希望的な-絶望的な	弱い-強い 良い-悪い 従属的な-支配的な 真面目な-不真面目な 他人思いな-自分勝手な

注1) 形容詞対のうち、ポジティブな意味を持つ単語は左へネガティブな意味を持つ単語は右へ配置した。

注2) 「従属的な-支配的な」といったポジティブかネガティブか判断しがたい単語の位置づけは、中核的感情欲求を参照し決定した。

8項目から質問項目に不備があった2項目を除く6項目、「怒りの制御」7項目について4件法で回答を求めた。以上を用いて、紙媒体の質問紙およびGoogle LLC社が提供するサービスであるGoogle Formsを用いて調査を行った。

調査では、年齢、性別の記入を求めた。調査は無記名であり、回答は任意である点、回答の拒否、中断が可能である点、拒否や中断をした場合に不利益は生じない点、個人情報の保護には最大限配慮する点を紙面に明記した。質問紙法調査は、大学での講義の最中に質問紙を集団配布する集団法、また、個人に直接配布する縁故法で実施し、無記名で回収した。Google Formsでは、関西圏の私立大学の2つの講義で調査参加依頼を行い、質問項目への回答を求めた。

### 第3章 結果

本研究ではSTAXIの怒りの表出パターンである怒りの抑制・怒りの制御の2つの下位尺度得点を合計して用いた。そのため、まず、怒りの抑制・怒りの制御の2つの下位尺度の項目を合わせた際の項目のまとまりのよさを調べるため、怒りの抑制8項目、怒りの制御6項目を合計した計14項目（以降、怒りの表出パターン項目とする）についての $\alpha$ 係数を算出した。怒りの表出パターン項目の $\alpha$ 係数は.77であった。次に、特性怒り得点の平均値を算出した調査対象者ごとに算出した。合計点の平均値は $23.86 \pm 5.22$ であった。さらに、怒りの表出パターンの、怒りの制御と抑制を合算した合計得点（以降、怒りの表出パターン得点と示す）の平均値を調査対象者ごとに算出した。合計得点の平均値は、 $31.21 \pm 5.96$ であった。

怒りの高さが感情語の内包的意味に及ぼす影響を調べるため、STAXIの特性怒り得点と怒りの表出パターンの怒りの抑制・制御得点から調査対象者を3群に分けた（以降、怒り抑制3群と示す）。群分けについては、怒りを抱きやすく抑制しやすい者と、怒りを抱きにくく抑制しない者における感情語の内包的意味の違いに着目するという本研究の目的を踏まえると、怒り抑制低群および高群には、その特性がより顕著な者が含まれることが重要だと考えられる。従って、本研究では、研究の目的および各群の人数に鑑み、群分けの基準に最も適切であると考えられる平均値を採用し、群分けを行った。特性怒り得点と怒りの表出パターン得点共に平均値より低い者を怒り抑制低群（28名）、特性怒り得点、怒りの表出パターン得点、どちらかが平均

値よりも高い者を怒り抑制中群（69名）、特性怒り得点、怒り表出パターン得点共に平均値よりも高い者を怒り抑制高群（26名）とした。

また、本論文では、群の主効果の有意性判定は5%水準において行った。ただし、群間における評定平均値の差の有意性判定は検定の多重性を考慮し、Bonferroniの修正法の考え方を参考にして、1%水準において行った。そして、有意な結果が見られたもののみを記載した。分析方法の詳細と結果について以下に記す。

5つのスキーマ領域に属する各形容詞対で、怒り抑制3群間でどのような違いが生じたかを調べるため、感情語ごとに3群における1要因分散分析を行った。その結果、「①嬉しい」の【A 断絶と拒絶】に属する「あたたかい - 冷たい」、「幸福な - 不幸な」、「明るい - 暗い」、【B 自律性と行動の損傷】に属する「広がりのある - 広がりのない」、「有意義な - 価値のない」、【C 他者への追従】に属する「すき - きらい」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「安全な - 危険な」、「公然の - 秘密の」、「希望的な - 絶望的な」、「②怒った」の【D 過剰警戒と抑制】に属する「解放的な - 抑圧的な」、【E 制約の欠如】に属する「従属的な - 支配的な」、「③悲しい」の【A 断絶と拒絶】に属する「安定的な - 不安定な」、「明るい - 暗い」、【B 自律性と行動の損傷】に属する「広がりのある - 広がりのない」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「解放的な - 抑圧的な」、「公然の - 秘密の」、【E 制約の欠如】に属する「真面目な - 不真面目な」、「④怖い」の断絶と拒絶に属する「あたたかい - 冷たい」、【B 自律性と行動の損傷】に属する「頼もしい - 頼りない」、「広がりのある - 広がりのない」、【C 他者への追従】に属する「すき - きらい」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「希望的な - 絶望的な」、【E 制約の欠如】に属する「良い - 悪い」、「⑤嫌い」の【A 断絶と拒絶】に属する「幸福な - 不幸な」、「明るい - 暗い」、【B 自律性と行動の損傷】に属する「満足な - 不満な」、「広がりのある - 広がりのない」、【C 他者への追従】に属する「能動的な - 受動的な」、「すき - きらい」、「優しい - 厳しい」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「穏やかな - 激しい」、「希望的な - 絶望的な」、「弱い - 強い」で3群間の主効果が有意であった（すべて  $F(2,120) > 4.13, ps < .05$ ）。怒り抑制3群における各感情語において3群間の主効果が有意であった形容詞対と評定平均値をTable 3に示す。Figure 1に、怒り抑制3群における5つの基本的感情において3群間の主効果が有意であった形容詞と評定平均値を示している。Figure 1から、「①嬉しい」の「あたたかい - 冷たい」、「幸福な - 不幸な」、「明るい - 暗い」、「広がりのある - 広がりのない」、「有意義な - 価値のない」、「すき - きらい」、「公然の - 秘密の」、「希望的な - 絶望的な」、「②怒った」の「従属的な - 支配的な」、「③悲しい」の「真面目な - 不真面目な」、「⑤嫌い」の「能動的な - 受動的な」において、怒り抑制高群で評定が高くなっている可能性が指摘できる。

また、「①嬉しい」の「安全な - 危険な」において、怒り中群で評定が低くなっている可能性が指摘できる。さらに、「②怒った」の「解放的な - 抑圧的な」、「③悲しい」の「安定的な - 不安定な」、「明るい - 暗い」、「広がりのある - 広がりのない」、「解放的な - 抑圧的な」、「公然



Table 3. 怒り抑制3群における各感情語において3群間の主効果が有意であった形容詞対と評定平均値

		低群	中群	高群
①嬉しい	あたたかい - 冷たい	1.67 (0.61)	1.50 (0.67)	2.00 (1.38)
	幸福な - 不幸な	1.21 (0.41)	1.29 (0.66)	1.88 (1.70)
	明るい - 暗い	1.50 (0.74)	1.46 (0.88)	2.07 (1.49)
	広がりのある - 広がりのない	2.25 (0.92)	2.52 (1.33)	3.11 (1.39)
	有意義な - 価値のない	1.85 (0.89)	1.73 (0.81)	2.50 (1.39)
	すき - きらい	1.60 (0.73)	1.58 (0.69)	2.11 (1.39)
	安全な - 危険な	2.53 (0.96)	2.00 (0.93)	2.46 (1.36)
②怒った	公然の - 秘密の	2.96 (1.13)	3.00 (1.35)	3.42 (1.41)
	希望的な - 絶望的な	1.53 (0.74)	1.46 (0.75)	2.19 (1.62)
	解放的な - 抑圧的な	5.89 (1.10)	5.50 (1.44)	4.38 (1.67)
	従属的な - 支配的な	2.03 (0.96)	2.33 (1.06)	3.23 (1.14)
③悲しい	安定的な - 不安定な	6.42 (0.85)	6.19 (0.98)	5.69 (1.12)
	明るい - 暗い	6.11 (1.24)	6.27 (0.78)	5.50 (1.60)
	広がりのある - 広がりのない	4.76 (1.68)	5.14 (1.43)	4.07 (1.54)
	解放的な - 抑圧的な	4.88 (1.42)	4.31 (1.35)	4.30 (1.54)
	公然の - 秘密の	5.34 (1.35)	5.40 (1.38)	4.34 (1.05)
	真面目な - 不真面目な	3.76 (1.63)	3.34 (1.40)	4.34 (1.19)
	あたたかい - 冷たい	6.35 (0.67)	6.20 (0.90)	5.61 (1.65)
④怖い	頼もしい - 頼りない	5.67 (1.24)	5.33 (1.33)	4.57 (0.98)
	広がりのある - 広がりのない	5.25 (1.69)	5.07 (1.56)	4.15 (1.15)
	すき - きらい	5.39 (1.49)	5.72 (1.18)	4.80 (1.62)
	希望的な - 絶望的な	6.46 (0.69)	6.23 (0.78)	5.69 (1.25)
	良い - 悪い	5.67 (1.05)	5.82 (0.93)	4.96 (1.58)
⑤嫌い	幸福な - 不幸な	5.96 (1.36)	6.05 (0.96)	5.26 (1.31)
	明るい - 暗い	6.25 (0.88)	6.20 (1.05)	5.34 (1.38)
	満足な - 不満な	6.25 (1.32)	6.26 (1.14)	5.42 (1.72)
	広がりのある - 広がりのない	5.25 (1.64)	5.59 (1.29)	4.50 (1.67)
	能動的な - 受動的な	4.00 (2.03)	5.34 (1.73)	4.15 (1.56)
	すき - きらい	6.85 (0.59)	6.37 (1.15)	6.00 (1.67)
	優しい - 厳しい	5.85 (0.97)	5.56 (1.10)	4.96 (0.95)
	穏やかな - 激しい	5.60 (1.31)	5.68 (1.32)	4.96 (1.14)
	希望的な - 絶望的な	5.82 (1.12)	5.98 (0.83)	5.07 (1.49)
弱い - 強い	4.71 (1.74)	5.33 (1.75)	4.34 (1.49)	

注) 括弧内の数値は標準偏差を示す。

の - 秘密の」「④怖い」の「あたたかい - 冷たい」, 「頼もしい - 頼りない」, 「広がりのある - 広がりのない」, 「すき - きらい」, 「希望的な - 絶望的な」, 「良い - 悪い」, 「⑤嫌い」の「幸福な - 不幸な」, 「明るい - 暗い」, 「満足な - 不満な」, 「広がりのある - 広がりのない」, 「すき - きらい」, 「優しい - 厳しい」, 「穏やかな - 激しい」, 「希望的な - 絶望的な」, 「弱い - 強い」において、怒り抑制高群で評定が低くなっている可能性が指摘できる。どの群間でどのような違いが生じたかを調べるため、3群における多重比較を行ったところ、「①嬉しい」の「有意義な - 価値のない」, 「③悲しい」の「真面目な - 不真面目な」で、怒り抑制中群と怒り抑制高群に違いがあり、怒り中群よりも高群の方が感情語をネガティブに評価していることが分かった ( $p < .01$ )。また、「②怒った」の「解放的な - 抑圧的な」, 「⑤嫌い」の「明るい - 暗い」で、怒り抑制低群・中群と怒り抑制高群に違いがあり、怒り中群よりも高群の方が感情語をポジティブに評価していることが分かった ( $p < .01$ )。次に、「②怒った」の「従属的な - 支配的な」で、怒り抑制中群と怒り抑制高群に違いがあり、怒り中群よりも高群の方が感情語をネガティブに

怒りの抑制高群に特有の感情語に対する内包的意味の傾向（黒木優花）

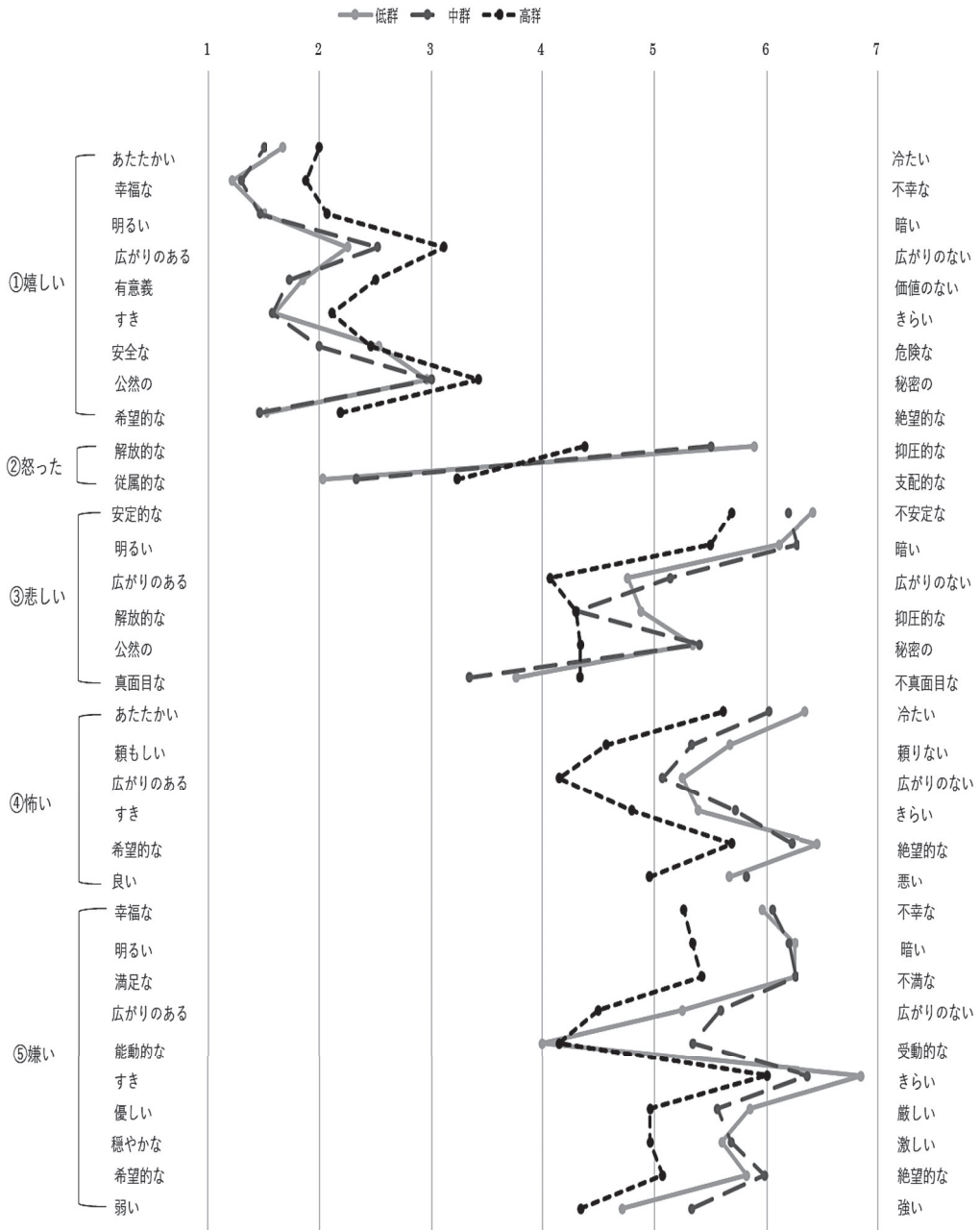


Figure 1. 怒り抑制3群における5つの基本的感情において3群間の主効果が有意であった形容詞と評定平均値

注) 主効果の有意性判定は5%水準において行った。

評価していることが分かった ( $ps < .01$ )。そして、「④怖い」の「頼もしい - 頼りない」, 「希望的な - 絶望的な」において、怒り低群よりも高群の方が感情語にポジティブな意味を込めやすいことが分かった ( $ps < .01$ )。さらに、「④怖い」の「良い - 悪い」, 「⑤嫌い」の「幸福な - 不

幸な」,「広がりのある - 広がりがない」,「希望的な - 絶望的な」で, 怒り抑制中群よりも高群の方が感情語をポジティブに評価していることが分かった ( $ps < .01$ )。最後に,「⑤嫌い」の「能動的な - 受動的な」で, 怒り抑制低群・高群より中群の方が, 感情語にネガティブな意味を込めやすいことが分かった。そして,「優しい - 厳しい」で, 怒り低群中群よりも, 高群の方が, 感情語にポジティブな意味を込めやすいことが分かった。

## 第4章 考察

本研究では, SD法を用いて身近な他者に対して用いた基本的感情語の内包的意味と, 怒りの抑制傾向の関連を検証することを目的に研究を行った。まず, 調査対象者を怒りの抑制傾向の高・中・低群に分け, 各感情語におけるスキーマ領域の各形容詞について, 群ごとに統計的処理を行ったところ, 怒りを抱きやすく抑制しやすい者ほど感情語に潜在的自己愛タイプの特性を内包する意味を込めやすい傾向が見られるという仮説は,「①嬉しい」の【B自律性と行動の損傷】に属する「有意義な - 価値のない」,「②怒った」の【E制約の欠如】に属する「従属的な - 支配的な」,「③悲しい」の【E制約の欠如】に属する「真面目な - 不真面目な」においてのみ支持され, その他の感情語の形容詞については支持されなかった。

### 「①嬉しい」の内包的意味と怒り抑制の関連について

まず,「①嬉しい」の評定において,【B自律性と行動の損傷】に属する「有意義な - 価値のない」で, 怒り抑制高群の方がネガティブな意味を込めやすい結果が得られた点については, 自己愛タイプの一つであるCNの特徴と合致する結果であると考えられる。CNの特徴として, 自己評価および怒りの正当性評価が低いことが挙げられる(小松, 2004; 田代・興津, 2013)。「嬉しい」といったポジティブ感情には, ネガティブ感情によって高められた不快な気分や, 血圧などの自律神経系の亢進を元に戻し, ネガティブ感情からの脱却を図る機能があることが指摘される(Fredrickson & Levenson, 1998)。怒り抑制高群でよりネガティブに評価される傾向があった「有意義な - 価値のない」が属する【B自律性と行動の損傷】は, 有能感と自律性と自己同一性に関連する領域であったが, ポジティブな感情語である「嬉しい」の評定でこのような結果が見られたことは, 怒りを抱きやすく抑制しやすい者は,「嬉しい」に「価値のない」という意味を込めることで, 自己の有能感や自律性に関する評価が現実の能力と比較して低くなっている可能性が指摘できる。そして, 怒り表出の正当性評価については, 優越感・有能感が高いほど, その怒りの表出が正当であると評価されやすい傾向があることが指摘されているが, 怒り抑制高群では, 上記のような理由で自己の能力に関する評価が低い傾向にあるために, 怒りの正当性を不当と評価しやすく, 怒りを抑制しやすい傾向にある可能性が指摘できる。

### 「②怒った」の内包的意味と怒り抑制の関連について

次に、「②怒った」の評定において、怒り抑制高群の方が【D 過剰警戒と抑制】に属する「解放的な - 抑圧的な」、にポジティブな意味を込めやすい結果が得られた点、【E 制約の欠如】に属する「従属的な - 支配的な」、で怒り抑制高群の方がネガティブな意味を込めやすい結果が得られた点について述べる。怒りは、闘争か逃走（fight or flight）反応との関連が指摘される感情であり、怒りの生起には、個人が対象に接した際、その対象が有害なものであるか、そして、克服できるものであるかという2点に対する自発的・主体的評価が必要であるとされる（Arnold, 1960）。【D 過剰警戒と抑制】は、自発性と関連するスキーマ領域である。また、この反応のうち、闘争に属すると考えられる怒りの表出は、身体的攻撃と関連する状態であると考えられることを踏まえると、怒りを抱きやすく抑制しやすい者が「怒った」において、【D 過剰警戒と抑制】に属する「解放的な」という評定しやすかった結果は、「怒った」に解放的な意味を込めて用いることで、自身の身に生じた闘争か逃走反応が闘争に移行する危機を感じやすく、また、そのような危機性が他者に伝わる可能性を過大評価する傾向があるために怒りを抑制しようとする可能性が指摘できる。加えて、【E 制約の欠如】に属する「従属的な - 支配的な」で、怒り抑制高群がより「支配的な」意味を込めやすかった点は、愛着タイプであるCNの特徴と合致するものであると考えられる。怒りは、個人の憤りをもっともよく他者に伝達すると考えられる感情語である。怒り表出の正当性評価が低いことはCNの特徴の一つであるが、現実的な制約と自己制御に関わる【E 制約の欠如】において「支配的な」意味を込めやすいことは、例えば、自己の怒りを現実に即さないほど他者の権利を不当に阻害するものだと評価するといった風に、怒りにより伝達される脅威を過大評価しすぎることに繋がる可能性が指摘できる（田代・興津, 2013）。そして、このような傾向のために怒りの抑制が生じる可能性が指摘できる。

### 「③悲しい」の内包的意味と怒り抑制の関連について

次に、「③悲しい」の評定において、怒り抑制高群の方が【B 自律性と行動の損傷】に属する「広がりのある - 広がりのない」にポジティブな意味を込めやすい結果が得られた点、【E 制約の欠如】に属する「真面目な - 不真面目な」において、ネガティブな意味を込めやすい結果が得られた点について述べる。「悲しい」は自身の悲嘆を端的に相手に伝えるのに適した感情であると考えられる。山根（2007）は、悲しいは、「他者にいじめられたことが悲しく、自分にそのような思いをさせた他者を許せないと感じた。」などのように、怒りの生起要因ともなる感情であり、怒り感情生起の際には、その怒り表出の適切性を吟味する手掛かりとしても機能する（山根, 2007）。また、悲しいは、「悲しい」という感情に浸ることで、その感情が強化される、感情の自己強化現象が生じる感情であることが指摘される（山根, 2007）。これによる単一感情の強化は、個人の視野狭窄に繋がると考えられる。しかし、本研究で、「悲しい」に、怒り抑制高群の方が自律性や有能感と関連する【B 自律性と行動の損傷】の「広がりのある」意味を込め

やすかった結果がみられた点からは、怒りを抱きやすく抑制しやすい者は、ネガティブ感情伝達の役割をすることが多い「悲しい」にポジティブな意味を込めて用いることで、悲しいにより伝達される脅威や、単一感情の強化による視野または自己能力狭窄の可能性を過小評価し、怒りに繋がる「悲しみ」感情を回避しようとする傾向のあることが指摘できるかもしれない。そして、【E 制約の欠如】は、現実的な制約に関わる領域であるが、その領域において「不真面目な」という評定をしやすいことは、怒り抑制高群が怒り表出の適否を検討する際、自己の悲しみを「不真面目」で制御すべきものとするために、怒りの表出を抑制する可能性が指摘できる。

#### 「④怖い」の内包的意味と怒り抑制の関連について

次に、「④怖い」の評定において、【B 自律性と行動の損傷】に属する「頼もしい - 頼りない」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「希望的な - 絶望的な」、「良い - 悪い」では、怒り抑制高群の方がネガティブな意味を込めやすいという仮説に反し、ポジティブな意味を込めやすい結果が得られたという点で、仮説は支持されなかった。以下、この結果について述べる。

「怖い」は、自分の恐怖を他者に伝えるのに最も適した語だと考えられる。恐怖の克服方略として、山根(2007)は、恐怖対象との優劣関係の逆転を挙げる。他者の怒り顔が恐怖情動を誘発する素因となる点を踏まえると、表情や行動による怒りの表出は、恐怖対象との優劣関係の逆転の際に有効な手段だと考えられる(久保・賀・川合, 2014)。「【B 自律性と行動の損傷】と【D 過剰警戒と抑制】は、自律性・自発性とそれぞれ関連するスキーマ領域であるが、これらに属すると考えられる形容詞対の内、特に自律性と関連が深いと考えられる「頼もしい - 頼りない」、自発性保持と関連すると考えられる「希望的な - 絶望的な」、「良い - 悪い」で上記のような結果が得られたことは、怒りを抱きやすく抑制しやすい者は、恐怖を感じる対象に面した際、「怖い」にポジティブな意味を込めることで、自身の自律性・自発性を過大評価、または対象への恐怖を過小評価することで怒りの表出に至らず、抑制的になる可能性が指摘できる。しかし、実際には恐怖対象が有する脅威は減少しないため、恐怖感情に対し、自己の能力の過大評価・恐怖対象への過小評価では対処しきれなくなった際、怒りの抑制と関連するとされる、「キレる」のような突発的な怒りが発生する可能性が考えられるかもしれない。

#### 「⑤嫌い」の内包的意味と怒り抑制の関連について

次に、「⑤嫌い」の評定において、【A 断絶と拒絶】に属する「幸せな - 不幸な」・「明るい - 暗い」、【B 自律性と行動の損傷】に属する「広がりのある - 広がりのない」、【C 他者への追従】に属する「優しい - 厳しい」、【D 過剰警戒と抑制】に属する「希望的な - 絶望的な」では、怒り抑制高群の方がネガティブな意味を込めやすいという仮説に反して、ポジティブな意味を込めやすい結果が得られたという点で、仮説は支持されなかった。また、【C 他者への追従】に属する「能動的な - 受動的な」では、怒り中群が低・高群に比べてネガティブな意味を込めやすい結果



が得られたという点で仮説は支持されなかった。以下、これらのことについて述べる。

嫌悪とは、人にとって物理・心理的に有害である対象を除去する拒否の機能を持つ感情である（斎藤，1990）。そして、嫌悪と怒りには、自分よりも劣位の者に対して抱かれやすい感情であること、蓄積しやすい感情であることといった共通点が見られる（斎藤，1990，山根，2007）。また、金山・山本（2003）から、自分より劣位の者に嫌悪感情を抱く者は、嫌悪感情と同時に、嫌悪対象者に対する憐れみの気持である憐憫感情を抱く傾向があることが明らかになっている。怒りの抑制と関連が深いとされるCNは、他者が自らに完璧であることを望んでいると考え、その期待に応えるために感情の表出を抑制することが特徴として挙げられる自己愛タイプである（田代・興津，2013）。先述のスキーマ領域に属する形容詞対において、怒り抑制高群の方がポジティブな意味を込めやすい結果が得られたことは、怒りを抱きやすく抑制しやすい者は、怒りを表出することで他からネガティブな評価を受けることを懸念し、怒りの表出を抑制する一方、怒りを感じやすいがために内的に蓄積された怒りの発散方策として、「嫌い」という感情語にポジティブな意味を込めて用いることで、自身が他者に情けをかけることができる存在であるという自他関係での優位性を意識的、もしくは無意識的に呈示し、自らが感じた不快感を怒りという形で表出することを回避する傾向がある可能性が指摘できる。

さらに、【C 他者への追従】に属する「能動的な - 受動的な」で、怒り抑制中群がよりネガティブな意味を込めやすかった点については、まず、嫌悪や怒りといった感情は、蓄積しやすい性質を持つことが知られる（山根，2007）。「嫌い」の拒否的機能は、陰口や意地悪といった怒りを感じた際にも取りうると考えられる行動で提示されるが、このような行動は、「嫌い」を感じた当事者が自ら嫌悪対象に働きかけることでなされる（金山・山本，2005）。怒り低群は、怒りを抱きにくく抑制しにくい群であったことを踏まえると、そのような行動をとる可能性は、怒りをより抑制しにくい群でより高くなると考えられる。【C 他者への追従】は、正当な欲求や感情表現の自由と関連する領域であったが、この領域において「能動的」な意味を込めやすい傾向が見られたことは、怒りを抱きにくく抑制しにくい者は、「嫌い」に「能動的な」意味を込めることで、怒りの発生に繋がる嫌悪感情を、自らの働きかけにより発散できるものとして捉えることで、怒りを抱きにくい可能性が指摘できる。また、怒り抑制高群でも同様の傾向が見られた点については、怒りを抱きやすく抑制しやすい者は、先述の嫌悪の延長線上にある怒りを意識的、もしくは無意識的に呈示することによって自他関係の優位性を確保する可能性があるという考察内容と合致する結果であると考えられる。「嫌い」に能動的な意味を込めて用いることが、怒りを感じやすく抑制しやすい者に、より自他関係の優位性を感じやすく、または提示しやすくさせ、怒りを回避する傾向を促進させる可能性が指摘できる。怒り抑制低群・高群の「⑤嫌い」に対する評価傾向が類似したことは、以上のような理由によると考えられる。

そして、怒り抑制中群で「受動的な」意味を込めやすい傾向が見られた点については、怒りの生起機序の関連が考えられる。嫌悪と怒りは、誰かに危害を加えられたという被害者意識に

より生じる(斎藤, 1990; 阿部・高木, 2006)。性格的に怒りを抱きやすいが抑制はしにくい、もしくは怒りを抱きにくいが抑制をしやすい者のうち、前者は、「嫌い」に感情表現の自由などと関連する【C 他者への追従】の「受動的な」意味を込めて用いることで、自他に自らが受けた被害を過大評価して伝える傾向を持つことで、怒りや嫌悪を増幅させやすく、怒りを抱く傾向が高まる可能性が指摘できる。また、後者は、CNの特性と合致する結果だと考えられる。CNは、他者依存を特徴とする自己愛タイプである。怒りを抱きやすく抑制しやすい者は、怒りを蓄積・制御する機会が相対的に多いため、蓄積された嫌悪や怒りに自ら対処する方策を持つことがより求められることが推測できる。しかし、怒りの抑制と関連のあるCNが怒りの表出によりネガティブな他者評価を受けることを恐れる特性を持つことを考えると、そのような機会が少ない場合は、「嫌い」に「受動的な」意味を込めて用いることで自分の被害性を強調し、怒りの表出による優位性の確保などにより自ら嫌い感情の克服に努めるより、他者からの指示や援助といった支援によって不快感情を克服する方策を取りやすい可能性が指摘できる(田代・興津, 2013)。そして、そのような結果として怒りが抑制される可能性が指摘できる。

また、「⑤嫌い」の評定で差が見られた、【A 断絶と拒絶】・【B 自律性と行動の損傷】などの4つの領域は、それぞれ愛着や自発性に関わる領域であり、それらを獲得しえない場合、適応に困難が生じる可能性がある点で、他者からの憐れみ感情と関連しやすい領域だと考えられる。「⑤嫌い」の評定で、その他の形容詞対で評定に差がなかった要因としては、そのような形容詞は、自他関係における優位性を示す際に重要でないと判断されている可能性が指摘できる。

#### 感情語の内包的意味と怒りの抑制傾向の関連から見える今後の展望

本研究から、感情語の内包的意味の個人差が怒りの抑制の要因となる可能性が示唆された。

これまでの怒りの抑制に関する研究では、怒りの不適切な抑制・制御の背景要因として主に自己愛という性格特性の存在が指摘されてきた(小塩, 2002; 阿部他, 2006)。しかし、本研究で上記のような結果が得られたことから、怒りの抑制・制御は、性格特性よりも感情語に対する認知が先行して生じる可能性が指摘できる。

山崎・内田・横嶋・内山(2016)は、感情といった全ての心的特徴は、人格構造の底部に広く展開する無意識の影響を受けると述べる。自己愛といった性格特性は、個人の内に存在し、個人の特徴的な行動や思考を決定する精神身体システムの構造とも定義されるものであり、より潜在的(implicit)水準に近いものであることが指摘できる(Allport, 1961)。対して、アサーション・トレーニングといった介入法で取り扱われる認知(cognition)は、外界からの刺激を処理し、反応を引き起こす過程を指すが、これは、個人が主体的に処理対象となる刺激を選択していると考えられる点で、より顕在的(explicit)水準に近いものであると考えられる(寺西, 1983)。もし、怒りの抑制・制御が感情語の内包的意味という認知のみと関連して生じるならば、より性格特性と結びつきが深いと考えられる潜在的な感情語の内包的意味には他者との差が見

られず、認知的な側面と関連が深いと考えられる顕在的な内包的意味においてのみ他者との差が見られるはずである。従って、今後は感情語の顕在的な内包的意味の側面を測定するのに適したSD法に加え、潜在的側面を測定するのに適したIAT（implicit association test）を用いた測定を行うことで、個人の性格的側面と認知的側面が感情語の内包的意味に及ぼす影響とその違いについてより精査することが求められる（Greenwald, McGhee, & Schwarz, 1988）。

次に、個人の認知に焦点を当て、自分の気持ち等をよりよく表現・伝達するアサーションを獲得するアサーション・トレーニングでは、個人のアサーションに関係する認知を把握し、それをより適応的に変化させることでアサーションの達成が目指される。従来のアサーション・トレーニングで対象とされた認知は、「私は絶対に失敗できない」や、「自己表現をしてもよいとは思えない」など、文脈に着目したものであった（園田, 2002）。だが、今回の研究から、怒りを抱きにくい者と抱きやすい者では、文脈構成の要素となる感情語に込める意味が異なることが見いだされた点から、怒りを抱きやすい人に上記のような認知が生じる根幹に、感情語を用いた際、そうでない者と比べて感情語のメッセージ機能が特有の意味を持って働きやすい可能性があることが示唆された。このような場合、アサーション・トレーニングで文脈などの表面的認知のみに焦点を当てるだけでは十分なアサーション能力は身につかない可能性が指摘できる。従って、今後は、今回の研究で用いなかったその他の形容詞対にて同様の研究を行い、怒りの表出パターンとより関連が深いと考えられる形容詞対を探ると共に、今回の研究で調査を行わなかった怒りの表出に関しても感情語の内包的意味を調査し、怒り感情が感情語の内包的意味に及ぼす影響をより詳細に検討することが望まれる。

さらに、本研究では、感情語の内包的意味が怒りの抑制要因になる可能性が示唆されたが、それがコミュニケーションや対人適応に及ぼす具体的な影響については明らかになっていない。コミュニケーションで重要だと考えられる概念に情動知能（emotional intelligence）がある（Salovey & Mayer, 1997）。情動知能とは、情動を正確に知覚・評価し、それを表現したり利用したりする能力であり、自己・他者情動への気づき・評価、情動の有効利用といった下位分類が想定されている（Salovey & Mayer, 1997）。もし、感情語の内包的意味がコミュニケーションや対人適応に影響を及ぼすなら、感情語の内包的意味の違いが大きいほど、情動知能が低くなることが予測される。従って、今後は感情語の内包的意味と情動知能の関連を検討し、内包的意味の違いが情動知能のどのような側面に影響を及ぼすのかを精査することが望まれる。

#### 〔引用文献〕

- 阿部 晋吾・高木 修（2005）. 怒り表出の対人的効果を規定する要因——怒り表出の正当性評価の影響を中心として 社会心理学研究, 21, 12-20.
- 阿部 晋吾・高木 修（2006）. 自己愛が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, 77, 170-176.
- Allport, G. W. (1961). Pattern and growth in personality. New York: Holt.
- Arnold, M. B. (1960). Emotion and Personality. Psychological Aspect, New York: Columbia University

Press.

- Fredrickson, B. L., & Levenson, R. W. (1998). Positive Emotions Speed Recovery from the Cardiovascular Sequelae of Negative Emotions. *Cognition and Emotion*, 12, 191-220.
- Gray, J. A. (1987). The psychology of fear and stress. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwarz, J. L. K. (1988). Measuring individual in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- 芳賀 純 (1988). 言語心理学入門 有斐閣.
- 平井 信義 (1991). 人格形成論 日本家政学会誌, 42, 401-404.
- 井上 弥 (1999). 感情表出抑制に及ぼす人・場所状況と他者意識の効果 感情心理学研究, 7, 25-31
- 伊藤 絵美 (2020). 「第9回スキーマ療法入門ワークショップ」テキスト 洗足ストレスコーピング・サポートオフィス.
- 小松 貴弘 (2004). 過敏で傷つきやすいタイプの状態像 上路 雄一郎・宮下 一博 (監) もろい少年の心 北大路書房.
- 小椋 たみ子 (2006). 言語獲得における認知的基盤 心理学評論, 49, 25-41.
- 久保 賢太・賀 洪深・川合 伸幸 (2014). 怒り状態の心理・生理反応 心理学評論, 57, 27-44.
- Lewis, M. (1995). *Shame: The exposed self*. New York: Guilford Press. (高橋 恵子 監訳 (1997) 恥の心理学——傷つく自己—— ミネルヴァ出版.)
- Malatesta, C. Z., & Wilson, A. (1988). Emotion cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- 宮下 敏恵・森崎 竜亮 (2004). 怒り感情の表出制御と精神的健康及び対人不安との関係 上越教育大学研究紀要, 23, 477-499.
- Nolen-Hoeksema, S. (1991). Responses to depression and their effects on the duration of depressive Episodes. *Journal of Abnormal psychology*, 100, 596-582.
- Novaco, W. R. (2008). Anger control: The development and evaluation of an experimental treatment. *Lexington, MA: DC Heath*.
- Novaco, W. R., & Taylor, J. L. (2008). Anger and assaultiveness of male forensic patients with development disabilities: links to volatile parents. *Aggressive Behavior*, 34, 380-393.
- 奥村 弥生 (2010). 「情動への評価」研究の展望——概念、情動過程での位置づけ、その形成について——九州大学心理学研究, 11, 109-118.
- 小塩 真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 金山 富貴子 (2016). 組織や集団内における対人嫌悪 「イヤとキライ」の心理学, 74, 13-16.
- 金山 富貴子・山本 眞理子 (2003). 嫌悪対象者に対する感情の構造 筑波大学, 26, 121-131.
- 金山 富貴子・山本 眞理子 (2005). 所属集団内の対人嫌悪事態における嫌悪者の行動 筑波大学心理学研究, 30, 13-24.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. J. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications* (pp. 3-34). Basic Books.
- 坂上 裕子 (1999). 感情に関する認知の個人差——感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連——教育心理学研究, 47, 411-420.
- 三宮 真智子 (2008). 言語情報の誤解に対するメタ認知を促す授業——learning by teaching の活用——鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 5, 71-79.
- Shannon, L.Z., Josie, G., & Suja, S. (2002). Silencing the self and suppressed anger: relationship to eating

- disorder symptoms in adolescent females. *European Eating Disorder Review*, 10, 51-60.
- 園田 雅代 (2002). 概説: アサーション・トレーニング 創価大学教育学部論文集, 52, 79-90.
- Spielberger, C. D., Krasner, S. S., Solomon, E. P. (1988). The experience, expression, and control of anger. In M. P. Janisse (Ed.), *Individual differences, stress, and health psychology*, 89-108. New York: Springer-Verlag.
- 鈴木 平・春木 豊 (2010). STAXI 日本語版 堀洋道 (監) 心理測定尺度集Ⅱ (208-213) サイエンス社.
- 高田 洋一郎 (1972). 言葉の意味と個体差 心理学評論, 15, 397-405.
- 田代 紘之・興津 真理子 (2013). 怒り表出・抑制に対する自己愛の影響 心理臨床科学, 3, 53-57.
- 寺西 千代子 (1982). 人間行動の研究——認知過程について—— 富山大学紀要富山大経済論集, 27, 2224-243.
- 戸田 正直 (1992). 感情——人をうごかしている適応プログラム—— 東京大学出版.
- 上原 俊介・森 丈弓・中川 知宏 (2019). 親密な関係における怒り感情表出と効果——生存時間による検討—— 実験社会心理学研究, 59, 25-36.
- 上杉 喬 (1998). 感情イメージの研究 (V) ——SD 法による感情イメージの検討—— 人間科学研究, 20, 68-77.
- Wardhaugh, R. (1985). *Hou conversation works*. Oxford: Blackwel.
- 渡辺俊太郎・小玉正博 (2001). 怒り感情の喚起・持続傾向の測定——新しい怒り尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—— 健康心理学研究, 14, 32-39.
- 山根 一郎 (2005). 「驚き」の現象学 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 13-28.
- 山根 一郎 (2007). 恐怖の現象学 人間学研究, 5, 113-129.
- 山崎 勝之・内田 香奈子・横嶋 敬行・内山 有美 (2016). 無意識と意識, そしてインプリシット心的特徴 鳴門教育大学研究紀要, 31, 1-18.
- Young, J. E., Klosko, J. S., & Weishaar, M. E., (2003). *Schema Therapy A Practitioner's Guide*. New York: Guilford Press.
- 湯川 進太郎 (2005). バイオレンス ——攻撃と怒りの臨床社会心理学—— 北大路書房.

#### 〔付記〕

本論文は佛教大学教育学部臨床心理学科に提出した令和4年度卒業論文をもとに執筆したものである。研究の一部は第40回日本生理心理学大会日本感情心理学会第30回大会合同大会2022において報告した。

(くろき ゆうか 教育学研究科臨床心理学専攻修士課程)  
(指導教員: 箕浦 有希久 講師)

2022年9月30日受理